

第8回 広島県中学校教育研究会健康教育部会研究大会報告

平成29年11月17日（金）に「第8回広島県中学校教育研究大会」を、79名の参加者を迎え、みよしまちづくりセンターにて開催しました。

- 1 趣旨 健康課題に対して、よりよく解決していく能力や資質を身に付け、生涯を通じて健康で安全な生活を送ることができる生徒の育成を目指す研究実践の交流及び協議を通じ、本県中学校における健康教育の推進を図る。
- 2 主題 「健康で心豊かにたくましく生きる力をはぐくむ健康教育の推進」
- 3 主催 広島県中学校教育研究会
- 4 主管 広島県中学校教育研究会健康教育部会
- 5 共催 広島県教育委員会
- 6 後援 三次市教育委員会
庄原市教育委員会
- 7 期日 平成29年11月17日（金）
- 8 会場 みよしまちづくりセンター ペペらホール（三次市十日市西六丁目10番45号）
- 9 実践発表

（1）発表1（食育）

「庄原市全体で取り組む食育
～生徒が主体的に考え実践する食育を目指して～」
庄原市立口和中学校 養護教諭 谷口 信子

（2）講評

広島県北部教育事務所教育指導課 指導主事 宮地 隆治 様

○ 学ぶべき点

- ① 市内中学校が市全体で協力して取り組んでいる。

学校同士の交流により、互いに学び合うことができる（相乗効果）。統一した指導を行うこととバラつきが少なくなり、生徒の意識も高まり、若い世代の食育推進につながっている。

- ② 効果的に食育を進めるために、栄養教諭（栄養士）と連携をしている。

食育関係者との協議の場の設定や担任と栄養教諭が連携することで、実感をともなった助言をいただくことができ、生徒の意識や意欲・知識が高まっている。

- ③ 生徒の主体性を促すために、小中連携を行っている。

「誰が」「何のために」という相手意識・目的意識を持たせることで、生徒の主体性につながっている。また、中学生だけではなく、小学生にも大きな影響を与えることができる。

○ 今後に向けて

- ① PDCAサイクルに沿って評価を充実させ、実践に向けての効果を明らかにしていく。
- ② 活動指標と成果指標が「目指す生徒像」になっているか、適切な評価を行っていく。

【質疑・応答】

Q：調理場と栄養士の配置はどうなっているのか。自校式であるか。

A：調理場は全部で10か所、自校式は東城中1校である。

それぞれの学校に栄養士又は栄養教諭がいる。

(3) 発表2 (安全教育)

「地域の防災を学び、自助・共助の実践力を育てる

～主体的、探究的な学びのプロセスから課題解決の力を育てる～」

広島市立三入中学校 教頭 花口 公嗣

(4) 講評

広島市教育委員会健康教育課 主任指導主事 東 健一郎 様

○ 防災教育 3つの視点

① 地域の実情をふまえた防災教育

生徒も保護者も被災者の経験をしており、学習としての必要性を感じている。

学校間での温度差が大きいからこそ、実情を踏まえた防災教育が必要である。防災教育に求められるものは、自助・共助の力であり、地域の人材を有効に活用して自助・共助の力を育んでいく。

② 教育活動に計画的に位置づける（総合的な学習の時間への位置づけ）

個人で関心のある内容を考え、学んだ事をどう生かすか、目的意識をもって学習している。

情報収集と防災は深い関連があり、学習したことを地域の方に発信し、役立つことで生徒たちは達成感・満足感を感じることができ、それが生徒たちの変容につながっていく。

③ 学習の成果と中学生に求められること

○学習したことが生かされるように、継続して行っていく。

○地域の防災活動（防災訓練）に積極的に参加できる生徒を増やす。

○「共助」の土台作りを中学校で行っていくことが必要である。

10 講話

演 題 「今後の広島県の健康教育の充実に向けて」

講 師 広島県教育委員会豊かな心育成課 健康教育係

指導主事 猪原 一郎 様

(1) 健康教育の方向性

- ・単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通して実現が図られる。
- ・様々な分野の全体計画と健康教育の関連付けを行うことで、カリキュラムマネジメントの充実を図り、効果的な指導を実現することにつなげる。

(2) 学校保健

○がん教育

- ・がん教育は保健体育科を中心に学校の実情に応じて教育活動全体を通じて適切に行うことが大切である。
- ・がんに関する科学的根拠に基づいた理解や、健康や命の大切さの認識等については、それぞれの校種で発達段階を踏まえた内容での指導が必要である。
- ・科学的根拠に基づいた知識などの専門的な内容を含むがん教育を進めるに当たっては、外部講師の参加・協力など関係諸機関と連携する。
- ・がん教育を実施するに当たって、児童生徒や家族にがん患者がいる場合や、家族をがんで亡くした児童生徒がいる場合など、授業を展開する上で配慮が求められる。

○薬物乱用防止教育については、年1回は開催することとし、学校保健計画に位置付け、専門的な知識を有する外部講師による指導を行うなど、引き続き実施してほしい。

(3) 学校安全

- ・学校安全の課題には、組織的取組の推進、系統的・体系的で実践的な安全教育の実施、学校の施設設備の整備充実、PDCAサイクルの確立、家庭・地域・関係機関との連携等がある。
- ・学校事故未然防止のために、学校安全計画や危機管理マニュアルの策定・改善を行い、教職員研修の充実を図る。
- ・事故発生直後の対応では、エピペンやAEDは使えるか、どこにあるのか、保護者への対応は誰がするのかなど、役割分担に基づいて実施することが求められる。
- ・初期対応時の対応として、基本調査を実施するためのフォーマットを準備しておくことよい。
- ・具体的な取組として、安全点検は月1回実施し、点検記録簿を保管します。また、Jアラートやヒアリ等、実情に応じて危機管理マニュアルを作成していく。
- ・ASUKAモデルや救急蘇生法の指針2015を活用して、全職員でAEDや心肺蘇生法の研修を深める。
- ・日々の下校指導や声掛け指導等を日常生活に織り込むことで、防災の意識を高め、命を守ることにつながる。

(4) 学校給食

- ・PDCAサイクルに基づいた食育推進をすすめるに当たり、給食時間や教科へ積極的に栄養教諭を活用していく。

1 1 講演

演 題 「生徒の主体的な学びにもとづく交通安全教育の進め方

～自転車通学の問題を中心として～

講 師 東北工業大学 教職課程センター 教授 小川 和久 様

(1) 中学生の交通事故のリスク

- ・小学生は飛び出し、中学生は自転車事故が多く、小中学校とも1年生の事故が多い。
- ・中学1年生は通学環境に慣れていないことや自転車が体に合っていないこと、荷物が多くバランスが崩れやすいことなどが、事故が多い原因となっている。
- ・自分自身の安全より仲間との関係を重視し、人間関係ができ始める5月以降事故が増加している。
- ・1年生は危ないが、素直なため教育効果が高い。

(2) 交通安全教育とは

- ・交通安全教育とは「リスクある道路交通環境への適応を支援するための能力開発」である。
- ・交通安全マップ作り等で外的環境におけるリスク等について学ぶとともに、内的環境（焦る、急ぐ等の感情）とどう向き合うか教育の中に入れる必要がある。

(3) リスク抽出の視点

- ・視点は、「高速走行」「歩車分離間隔」「車両との交錯」「視覚状況」の4つである。

(4) 交通安全マップ作りの教育

- ・大人と同じ危険予測ができるのは11, 12歳ころからである。
- ・中学生は、自分はできているという自己評価が高い。
- ・交通安全マップ作製は出発点で、それをどう生かすかがゴールである。
 - ① 危険な箇所を情報共有
 - ② 危険予測を考える
 - ③ リスク回避のための行動基準を考える
 - ④ 振り返り学習と評価を行う

(5) 教育方法

- ・他者観察法（ミラーリング）：他者の行動を鏡にして自分の行動を振り返る。
- ・コーチング技法：オープンクエスチョンを行う。
- ・リスク管理の教育：課題意識を育み自分の問題として受け止めさせる。
- ・感情コントロール教育：焦っているときには、どのように自分に言い聞かせればよいか考える。
- ・市民性の視点：私たちの行動が子供たちにどのように映っているか考える。
- ・共生社会と安全教育：視覚・聴覚障害の人たちを理解して自分はどのように行動するか考える。
- ・生徒自身が考え、どのような答えであっても生徒自身が意見を突き合わせる事が大切である。

(6) 自転車安全教育の実践

- ・中学校での実践事例の発表

(7) 東日本大震災について

- ・学校安全は3領域一体（生活安全・交通安全・災害安全），すべて，子供の命を守るための教育「リスクある環境への適応を支援するために能力開発」である。
- ・防災教育には相反する概念が同居する。（死と生，破壊と復興，悲しみと喜び，忘れたいと忘れない等）
- ・ネガティブとポジティブへの両概念に触れ，ネガティブからポジティブへ展開する必要性がある。

【質疑・応答】

Q：いかに自分の課題として考えさせるかが大切だと思った。高校に入るまでに中学でできることはあるか。

A：危険予測などは小学校からの積み重ねが大切である。高校と連携して高校生から中学生へ伝えられればとても良い。

感想：本校は80%が自転車登校。1年生の事故が多い理由がよくわかった。人ごとに終わっている生徒が多く目的意識を持たせて指導していきたい。文科省の安全を考えるDVDの活用などよくわかった。

A：転倒事故が多いため荷物をコンパクトにできないか学校での解決策を考える必要あり。

Q：八木地区で災害に遭った。思い出すと胸が詰まる思い。配慮が難しい。

ミラーリングをした後は生徒から出てきた意見で良いのか。

A：事前に生徒の実態を把握しておかなければならない。マイナスになることがある。子供たちがどういう課題を持って取り組むか。次の世代に伝えていくという自分の役割や使命感、目的意識を持たせることで乗り越えられることもある。答えや基準は明確に持つておく必要があるが、子供たちから意見ができるように仕向ける。